

たなか・ひとし 1969年京大法卒、外務省入省。アジア大洋州局長、外務審議官などを経て現在、(株)日本総研国際戦略研究所理事長兼(財)日本国際交流センターシニア・フェロー、63歳。



つづくものであったのだろうか。国内だけを見た戦略なき発言ではなかったか。最早、大きな米

外交戦略や企業戦略など「戦略」という言葉をよく耳にする。「戦略」という言葉の定義はなかなか難しいが、私は「戦略」とはビジョンでもなければ政策でもなく、ビジョンや政策で規定された大目的を達成するための手立てであると考えている。

現在の日本を見ると、何よりもこの戦略が欠けているのではないかと気がする。普天間基地移設問題での「最低でも沖縄県外」や尖閣問題での「法に従って粛々と」とか、ロシア大統領の北方領土訪問は「許されざる暴挙」といった発言が十分な戦略的考慮に基づ

時評

電気新聞

2011. 3. 30

ウェーブ

国の力の下で日米同盟を機軸として大抵のことが処理できた時代は過ぎたのかもしれない。米国や日本の相対的国力の低下と中国などの新興国の台頭という国際政治構造の大きな変化の中で、日本の国益擁護のためには十分な戦略が必要となっている。

私は戦略的考え方の重要な要素は戦略的兵器であるICBM(Intercontinental ballistic missile)であると冗談めか

戦略に必要な「ICBM」

して言っている。即ち、戦略を組み立てるには四つの要素—情報(information)、確信(conviction)、大きな絵(big picture)、力(might)—

ICBMが必要である。難しい外交交渉はこのような四つの要素からなる戦略が必要なのである。

例えば北方領土問題において、なぜロシアが大統領や重要閣僚の北方領土訪問をこの時期に強行し、中国や韓国企業との合併を持ちかけるのか、その背景は何か、といった点についての情報と情報の徹底的な評価が必要となる。その上で一定の方向性について確信を持って交渉に当たることが必要である。同時に単に北方領土問題につ

いての取引ではなく、ロシアと日本との東アジアにおけるた位置や中長期的利益といった大きな図式を描き、北方領土問題の解決をはかる上で日本が活用できる力は何

か詰めて考える必要がある。中国との関係についても同じことが言えると思う。中国が世界第2位の経済大国となったから援助は削減するという論理だけでは不

十分なのだと思う。日本はどういう中国を求めるのか、覇権を求めようとする中国ではなく国際協調を旨とする中国が望ましいとするならば、環境やエネルギー利用の効率化に向けた支援をすることも一つの大きな手立てではないのだろうか。北朝鮮といった価値観がまったく異なる国との間で外交が成り立つとすれば、それは唯一、

緻密な戦略を持つ時なのである。

戦略的思考は言うは易しく、実行は難しいということかもしれない。戦略的思考は決して受動的な概念ではなく、能動的に道を切り開いていく場合に必須となる。敗戦国として一定の所与の枠組みの中で受動的に生きてきた度合いが強い現代日本人にはなかなか能動

的戦略的思考はなじめないのかもれない。しかし、もう受動的に生きられる時代ではない。昨今の中東・北アフリカにおける専制政治打破の動きがこの地域の民主化に繋がっていくことを願うが、同時にエネルギー需給の逼迫が世界経済の混乱に繋がっていくことも避けなければならない。民主化を支援し安定的な中東地域を実現するのは並大抵のことではないが、日本も米国や欧州との十分な協議の下で役割を果たさなければなら

ない。外交の分野だけでなく、企業の活動においても戦略的思考は必須である。日本国内にとどまらないグローバルな戦略が必要とされているのである。そのような認識を持って戦略的思考を可能にする体制が政府においても企業においても構築されていくことを願いたい。